

リー・イーグルトン **聖人と学者の国**
ry Eagleton 鈴木聡 訳



聖人と学者の国

著者——テリー・イーグルトン

訳者——鈴木 聡

装幀——菊地信義

発行者——下中 弘

発行所——株式会社平凡社

〒102 東京都千代田区三番町五

電話東京(〇三)二六五一〇四七一〔編集〕

(〇三)二六五一〇四五五〔営業〕

振替 東京ハ―二九六三九

印刷——中央精版印刷株式会社

製本——中央精版印刷株式会社

発行日——一九八九年一月二三日 初版第一刷

定価——二四〇〇円

ISBN 4-582-34902-1

乱丁・落丁本のお取替えは直接小社

読者サービス係までお送り下さい
(送料は小社で負担します)。

聖人と 学者の国

イギリス！

Terry Eagleton

鈴木聡 訳

平凡社

Saints and Scholars

by Terry Eagleton

First Published by Verso 1987

© Terry Eagleton

Japanese translation rights arranged with Verso
through The English Agency (Japan) Ltd.

Japanese edition © 1989 by Heibonsha Ltd., Publishers

Printed in Japan

ハーバート・マッケイブに

この小説は全面的に空想上のものである。有名なロシアの批評家ミハイル・バフチーンフチーの兄、ニコライ・バフチーンは実際に、ルートヴィヒ・ヴィトゲンシュタイン——英語を用いた哲学者として今世紀を代表する存在——の親しい友人であつた。ヴィトゲンシュタインがしばらくのあいだ、アイルランド西海岸の別荘に住んでいたのもほんとうである。ただしそれは、本書ではのめかされているのよりもあとのことだつた。その他のことがらの多くは虚構である。

*には巻末に訳註を付した。

一九一六年五月十二日午前六時十分まえ、ジェイムズ・コノリーは、ダブリンのキルメイナム監獄の独房で横になっていた。そのとき突然、扉が開き、一団の人びとがどやどやとはいってきつた。一回の処刑のためにこんなにも多くの役人が必要だとは、まったく驚くべきことだった。独房の扉を通った人びとは次のような順番で列をなしていた。看守のショーン・マグラーとデイミアン・ウォルシュ。看守長のフランシス・ザヴィアー・メイザー。キルメイナム監獄の所長であるウィリアム・マーティン。ダブリン市聖ベネディクト教区教会牧師補であり監獄付き戒師であるトマス・ケリー尊師。キルメイナムの主任医師であるカーナン・オブライエン博士。そして、内務省を代表して刑の執行を見守るため参加したイギリスの文官、ヘンリー・クライトンである。独房のなかにはすでに、囚人の警護を命じられた看守のロバート・カーンズとパトリック・ドイルがいた。マグラー、ウォルシュ、メイザーの三人が最初に独房にはいった。囚人が暴力をふるおうとした場合、かれらの背後にいるもっと地位の高い役人たちを守るためである。肩と肩がぶつかるくらい無理をして狭い空間にからだを押しこんだ九人の男たちは、フットボール場の段の

うえでひしめくファンのように、立っていられるだけの場所を求めていくらか押し合わざるを得なかった。

コノリーは明るい緑色のオーヴァーオールを着ていた。それは、数分後に早朝の霧雨のなかでかれが銃殺されるとき、背後にする赤い煉瓦塀に対してかれの姿を際立たせることになるだろう。オーヴァーオールは厚手のキャンヴァス地でできていた。尻のまわりがきつくなっているのも、かれが恐怖のあまり漏らしても、あまりひどいしみはできないだろうし、じたばたもがいても外に溢れ出て不快な感じを与えたりはしないだろう。コノリーは青いロザリオを握りしめていたが、祈りを捧げているようには見えなかった。ロザリオは、不敬にもかれがそれを飲みこもうとしたり、それで自分の首を絞めようとしたりしないよう、間もなくかれの手から取りあげられることとなる。かれの妻、リリー・レノルズの写真が、検閲され適切に処置されたらしく、顔を下に向けて独房備えつけのテーブルのうえにそっとおかれていた。囚人が抵抗し気絶させることが必要となるための、看守たちは全員、重い木の棍棒を制服のしたにひそませていた。マグラーとウォルシュはそれだけでなく、上着のしたの肩からつるした皮ケースのなかに連発拳銃を携帯していた。その朝行なった身体検査にもかかわらず、コノリーが、その後なんらかの手段によって武器をつくるか手に入れるかして、いまこの瞬間までその使用を引き延ばしている場合に備えてであった。カーンズとドイルの両名は、それぞれひと組の手錠をもっていた。それは、いつもはベルトからさげられているのだが、いまははずされてポケットからいつでも取り出せるように

なっているのだった。オプライエン博士がさげている大きな黒い鞆のなかには、強い鎮静剤を詰めた皮下注射器がはいっていた。ほかにも鞆のなかには、慎しみのない行動や、注射器を見せたために生じる騒ぎを未然に避ける目的で、予備の器具がいくつかはいっていた。締め金具つきの革紐がついた、分厚く四角い、茶色の革製の重々しいさるぐつわ、拘束衣など。もしコノリーが逃走を企てたなら、看守長が、自らの裁量によっていくつかの制止手段のなかから選択を行なうだろう——射殺するか、気絶させるか、麻酔剤を飲ませるか、さるぐつわを嚙ませるか、それとも拘束衣を着せるか。

ヘンリー・クライトンは三十八歳だった。死刑囚よりも十歳若い。前日の朝、かれはファーンボロにある一戸だての家の戸口の段で妻に別れのキスをし、リヴァプールまで汽車に乗り、そこから連絡船でダブリンまでやってきた。これまでかれはアイルランドを訪れたことがなかった。かれが勤務している内務省の課は、刑務所担当であつてアイルランド問題担当ではなかったのである。かれの航海は不快なものであつた。その大部分は、船の便所のひとつのなかで吐き続けることに費やされた。かれは、自分の吐き気に当惑を覚えながら、自分といっしょに吐いている連中のうわべの無関心ぶりとそれをくらべていた。かれらのうちのある者は、便所とバーのあいだを規則的に往復し、船が揺れたりぐらついたりするにつれて黒ビールを飲んだりもどしたりすることによって、時間を過ごしていた。そしてときには、嘔吐と小用を同時に行ないつつ、まるで同志であるかのように、お互いに悪口をいいかわし合ったりもした。クライトンはふと、リヴァ

プール行きの列車のなかで自分の胃がすでにいささか調子がおかしかったことを思い出した。おそらくそれは、これから海の向こうで目撃することになる出来事を予期していたからなのだろう。なぜ自分がこの任務を命じられたのか、そこに着いてから自分がなにをすることになっているのか、かれには全然わからなかった。これまでの人生でかれが出会ったことのあるアイルランド人は三、四人にすぎなかったし、重い病氣にかかった人間に会ったことだって一度もなかった。上司の悪意によって自分が選ばれたのではないかと、かれはぼんやり思った。かれは自分でも、少年のように邪心のなさそうな自らの外見を意識していた。誰かが撃たれるところを見れば、少しはかれも鍛えられるだろうと、内務省の誰か高官が判断したのではないだろうか。内務省の幹部には元軍人タイプがかなりいて、決まったように、事務職の軟弱さについて不満をもらしていた。独房のなかに立ったクライトンは、コノリーの背の低さに驚いた。かれはコノリーが大男だと想像していたのだ。それはたぶん無意識のうちに、雄弁な演説家、闘争的な労働運動家というコノリーの評判に影響されていたからなのだろう。かれは、コノリーがエディンバラのスラム街で成長したことを知らない。コノリーが育った環境はとても、見ばえのする体格を養うのに適したものとはいえなかったのである。クライトンは、囚人が衰弱し病的な顔をしているのに気づいた。それはまちがいになく恐怖のせいだろうとかれは思った。コノリーがそんなふうに見えたおもな理由が、恐怖ではなく（かれが恐れていたのは確かだが）、ダブリンでの市街戦で受けた傷のため、緑色のオーヴァーオールのにしたに嚴重に繃帯を巻いていたせいなどとは、クライトンには思い

も寄らなかつた。コノリーの左の足首は、狙撃兵の撃った銃弾のためぐしゃぐしゃになっていた。そのせいで、かれは、慣例にしたがってテーブルのそばにすわるのではなく、独房の寝台に横たわっていたのだ。死刑囚が訪問者を迎える場合、横になったりせずわっていることが、慣習的な段取りであつた。こうした伝統からの逸脱を見て、所長のウィリアム・マーティンはおちつきをなくした。コノリーが横になったまま処刑執行団を迎えるというのは、どうもいささか無礼なことのように思えたのである。ちょうどそれは、客たちがパーティーに到着してみると、主人がベッドのなかにいたというようなものだ。マーティンはカーンズとドイルに命じて、囚人をテーブルによつて支えさせ、かれの足をテーブルの脚に絡めて安定させようとした。しかしコノリーは、すぐに倒れそうになり、石の床にぶつかる寸前にだきとめられた。その日の朝、三時間まえまでは、囚人は死刑囚用独房の内部を見たことさえなかつた。かれはずっと、ダブリン城病院のベッドに横たわっていたのだ。その医師団は、この数日のあいだ、処刑に備えてコノリーのからだをひとつに組み立てようと懸命に努力してきた。かれはすでに、医療チームが通常の患者に対して用いようななどは夢にも思わないうらい大量の麻酔剤の投与を受けていた。かれの足が切断されたりしては困るわけがひとつだけあつた。かれのからだのほんの一部でも、吊銃射撃部隊の眼を逃れてはならなかつたのである。この話を聞かされたときクライトンは、ある常習犯にかんするジョークを思い出した。その男は、監獄内で切断した何本かの手足を形見の品として老母のもとに郵送してほしいと頼んだのだつた。それでとうとうかれは、脱走を企てたとして獄吏

たちによって告発されることになったのだ。ウィリアム・マーティンは、病気の男の枕元まで行進してゆき、銃殺の場所までかれを引き立てることにともない、感傷的な神話が生まれてしまう危険を冒すつもりはなかった。軍はすでに、ベッドのうえに身を起こしたコノリーを軍法会議にかけることによる困惑に耐えなければならなかった。そのため、それ以上慣例からはずれた事態はできるだけ避けたい意向だった。コノリーは、まだ体内に血が残っているうちに、壁のところまで連れてゆかれ銃殺されなければならない。看守長のフランス・メイザーは、時間と競走して死刑囚を引きずってゆくという悪夢を見た。そんなことをしているうちに、コノリーのからだは細かく碎けて床のうえにちらばり、風のなかで吹き散らされてゆくのだった。メイザーは、あたふたと身をかがめ、細かいかけらをぎゅうぎゅう詰めて囚人をもとどおりの姿に戻そうと努めた。ところがコノリーは、一歩歩くごとに中身をなくしてゆき、監獄の中庭にたどり着く頃には、からっぽの郵袋のようにばたばたしているのだった。ただひとつだけコノリーの断片が残されていた。かれの心臓があつた位置で、袋のなかでびくびく動いているかたまりである。メイザーはそれを手でしっかりとつみこんで、急いで袋を釘で壁に打ちつけた。そのかたまりがライフル銃で狙いをつけるにじゅうぶんな標的となることを願いながら。

クライトンは、囚人が、テーブルのうえに何冊かの本を、ふたつのからの湯飲みで支えて並べていることに気づいた。聖書か、そうでなければたぶん祈禱書。ページのすみが折れたパンフレットの束。数冊のかさばったハードバック。かれは、コノリーが著述家であることを知っていた

ので、自分の著書を精読することによって最後の日々を過ごしたのだろうかと思った。クライトンの眼には、コノリーは文学者であるようには見えなかった。この瞬間にはむしろ、日曜日に外出してきたけちな水兵のようだった。というのも、オーヴァーオールは着ているものの、かれの顔と頭はごしごしこすって磨きあげてあったし、黒い髪はまるで鉄兜のように短く刈りこまれ、グルーチョ・マルクスのような口髭は鋭角的に刈りそろえられていたからだ。

独房にはいった男たちは、ほぼ二列になって広がり、囚人が挨拶のために立ちあがるのを待ちかまえるかのようにかれを見おろした。看守長が最初に死刑囚に呼びかけることが慣例だった。列席している役人たちのなかで囚人を個人的に知っているだけじゅうぶん身分が低く、同時に、主導権を握れるだけじゅうぶん身分が高い唯一の人間だったからである。メイザーは、身を伸ばしているコノリーをじっと見すえ、そしていった。「いいかな、ジム……」命令と、かれの健康を気づかう質問の中間にあるような調子だった。コノリーはメイザーを見つめ返して、いった。「いいよ」もう少し長く話していたら、かれの訛が、いくらかスコットランド風を帯びた北アイerlandのそれであることに、誰もが気づいただろう。

クライトンは、いったいどうやってコノリーを独房の外に連れ出すつもりなのだろうと頭を悩ませていた。死刑囚が、たとえそうできる力があるとしても、立ちあがって死に場所まで歩いてゆくことなどあるはずがないということを、彼は知らなかった。もしコノリーが通常の慣例にならって椅子にすわっていたら、ウォルシュかマグラーのどちらかが、メイザーの合図によっていき

なり椅子を蹴とばして払いのけていたはずだ。そして囚人の両腕が、転倒を避けるために差し伸ばされると、別の看守がそれをつかんで手錠をかけていただろう。これが、死刑囚用独房の決まった手続きであった。だが、それは手際のむつかしい作業で、やりそこなうことも間々あった。看守たちは、どんなに熟練していても、このときに臨むと神経質になりやすく、死刑執行の朝がくるまえに、お互いを実験台として、数度にわたって手はずを練習しておかなければならなかった。実際的にいえば、椅子を蹴って取り去ることは必ずしも必要とはいえない。でも心理学的な見地からいえば、それは、来るべきより激しい暴力に備える皮切りとなる、儀礼的な暴力として有用なのだ。それは、一撃のもとに囚人を一個の物体に変えてしまう荒っぽい行事がはじまったのだという象徴的な宣告であり、それによって、このときまでには囚人と親しくなっている看守たちが、かれを死へと導くことが少しは容易になるのである。囚人がおとなしくはついてこないだろうということが前提となっていた。もしかすると囚人は、狂暴で、臆病で、非協力的かもしれない。ひとが部屋にはいつてきたのを見てなにげなく立ちあがり、自ら進んでいっしょにドアから歩いて出てくる男を処刑するということには、なにか無作法というか、吐き気さえ催させるような感じがつきまとうことだろう。天候についてかれがひとことふたこと感想を述べたり、お宅の子どもさんはどうしているかと尋ねたりするかもしれないという耐えがたい可能性の危険にさらされるに違いないのだ。

今回の場合は、囚人が腰かけていないので、ウォルシュとマグラーは寝台のところまでまっす

ぐ進み、かれの両腕を自分たちの肩にかけさせ、きわめて慎重に床のうえに立たせた。ふたりが近づくとコノリーが少しからだをもちあげ作業を楽にしようとするのにクライトンは気づいた。クライトンは本能的に戸口からどいて、囚人が運ばれてゆく通路をつくろうとした。かれは、死刑囚が独房から出てゆくのはかれらがいってきた扉からではないことに気づいていなかった。処刑されることになっている人間を迷宮のような廊下のなかで連れ歩くというのは、必要でめんどろなことにすぎないだろう。まして、その男がわめいたり脱糞したりしていて、引きずってゆかなければならないとしたらどうだろう。他の死刑囚たちがこうしたすべてのことを近くで目撃し、自分たちの仲間が自分たちの独房のまえを連れられてゆきながら叫ぶのを耳にするというのもやはり、許しておくべきではないことだろう。マグラーとウォルシュがコノリーのからだを起こしているあいだに、カーンズとドイルは、寝台と反対側の壁に備えつけられた小型の衣裳箆をわきにずらした。毛皮のコートもイヴニング・ドレスもはいていないので箆は簡単に動いた。そのかげにはもうひとつの扉が隠されていた。メイザーが鍵でそれをあけた。まずメイザーが扉のなかにはいり、コノリーを連れてはいるよう看守たちに手招きをした。そのあとにケリー師が続き、それから他の役人たちも続いてはいった。気づいてみるとクライトンは、剣き出しのコンクリートの倉庫のなかにいるのだった。どちらかというところ、そこはがらんとした車庫のようでもあった。

扉をはいってすぐのところには担架がおかれていた。ウォルシュとマグラーは、そのうえにコノ